

参考資料①

(財)神奈川県高等学校教育会館「教職員のための夏期研修講座」 ワークショップ「表現教育」 08年度コンセプト (抜)

本講座の開講は、本年度で6年目となる。「教職員のための夏期研修講座」は、財団法人神奈川県高等学校教育会館が、10年計画の事業として、03年度以来毎年夏季休業中8月第1週に実施しているものであり、昨年度で折り返し点を過ぎたこととなる。

演劇的手法を用いたコミュニケーション教育は、神奈川県教委が、07年度に策定した「学力向上推進及び特色ある高校づくり推進事業計画」にも「演劇教育」という呼称で実践研究指定が配置されており、神奈川県立高校の教育実践として公認されたものと考ええる。しかし、学校設定科目*（いわゆる新タイプ校の系列科目・系科目）の開設、また、学習指導要領記載の既成科目や総合学習への応用など多くの実践がなされているにもかかわらず、開発教育・環境教育・平和教育等と異なり、教職員による教育研究ネットワークを持たないため、実践とともにその目的・内容を模索している状況と考える。

本講座は、毎年度、本講座のコーディネーターが劇団文学座との協議をおこない、講座においては、講師と参加者とのディスカッションを通して、演劇手法の教育への応用にどのような意義があるかを振り返る展開でおこなっている。

*英語・国語・数学等の文科省によって定められた教科科目以外に、各学校独自に設定できる選択科目。

高校の特色多様化政策によって生まれた単位制高校・総合学科などの所謂新タイプ校には、系科目・系列科目として環境・芸術・国際理解などの分野ごとに多数の学校設定科目が置かれている。神奈川県立高校では、演劇的手法を取り入れた学校設定教科・科目が、12校で27科目（「リトミック」のような関連性の高い科目も含む。また、半期・集中講座も1科目に数える）設定されている。（08年8月現在、横浜市高等学校演劇連盟調べ）

1. 各年度の研修内容

- 03年度（講師：文学座俳優／古川悦史氏・得丸伸二氏）においては、参加者とのディスカッションを随時おこない、教育現場で求められるコミュニケーションゲームを極力数多く紹介・体験するようにした。
- 04年度（講師：文学座演出家／望月純氏、俳優／木津誠之氏・目黒未奈氏）においては、03年度の実践から発展させ、多数のコミュニケーションゲームを並列的に紹介・体験する展開ではなく、階梯性を持ち深化させる内容とした。身体ほぐし・コミュニケーションゲームを徐々にスキルアップし、表現のエクササイズに時間をかけて日々深化させた。
- 05年度（講師：文学座演出家・玉川大学芸術学部パフォーミングアーツ学科講師（当時）／高瀬久男氏、俳優／高橋克明氏）においては、03年度・04年度の実践を検証し、コミュニケーションゲームのスキルアップよりは、コミュニケーションを教えるための根幹に重点を置いた。演劇を利用した表現教育の目的を、他人との関係をとること、他人に対して発信しそのために他人から受信すること、と明確に定めて、そのためのエクササイズを日々深化させた。
- 06年度（講師：文学座俳優／椎原克知さん・佐川和正さん）においては、次章の協議を文学座企画事業部とおこない、コンセプトを明確に定めて実践した。絵本「あらしのよるに」の立体化を経て、即興劇「学校で起きている問題」を最終日におこなった。
- 07年度（講師：文学座俳優／得丸伸二さん・加納朋介さん）においては、06年度のコンセプトを継承深化することを目的としておこなった。コンセプト「個と社会の関係性」については、非文学的テキストを用いたステイタスゲームとディスカッションの融合でのアプローチを試みたが、方法論の模索におわった。が、コミュニケーション能力の一つとして、非言語型のコミュニケーション（空気を読む力）が実践の中で強調された。言語型のコミュニケーションと非言語型のコミュニケーションという観点は、今後追求をするべき課題と考える。

2. 講座コンセプトの整理

05年度講座が目的意識を明確にした実践であり、本講座がコンセプトの整理を希求する契機となった。また、当時の中山文科大臣が、「学力低下批判」を学テ復活に象徴される「競争主義」にジャンプアップさせ、内閣・教育再生会議報告（08年1月31日）にある、詰め込み教育への逆行と競争主義・能力主義の強化また管理教育の復活の下地を作っていた状況に対する危機感があった。

このことから、05年11月26日（土）に、文学座公演中の紀伊國屋サザンシアターにおいて、「ワークショップ表現教育」の今後の展開について、企画事業部との話し合いをもった。

コーディネーターから、以下の資料を提示し、演劇的手法を用いたコミュニケーション教育に、資料中の「環境教育」と同様の意義を持つ可能性がないかを文学座に希求した。資料の記事はコーディネーター自身の記述である。

（資料略）

文学座からの回答は次の通りであり、以降、以下を講座カリキュラムのスタンスとしている。

- 1) 文学座は劇団であり、教育についての専門家ではない。また、フォーラムシアターなどのワークショップを専門におこなっている社会運動の、ないし、社会教育的な団体でもない。ワークショップの蓄積はあるが、あくまでも演劇に資するためのものである。ワークショップを教育的な意義から構築したり深化したりすることを劇団はおこなっていない。
- 2) 芸術としての演劇であるならば、教育としてダイレクトに指導することは出来るが、「ワークショップ表現教育」がそれを目的せず、演劇という行為の持つ教育的効果を期待するものであるならば、そのカリキュラムの主体は教職員であるべきである。
- 3) 2) の点からはコンセプトを示してもらいたい、1) の点からはワークショップの内容は派遣するアーティストに任せてもらいたい。

また、演劇手法の教育への応用の意義（教育目的）については、講座とともに（講座に参加する教職員の教育実践とともに）毎年深化をさせているが、現在は次のように整理をしている。

- 1) 自己認識・他者理解・共有という人間関係の本質において展開すること。言語型のコミュニケーションのみならず、非言語型のコミュニケーション（間・空気等）を視野に入れること。
- 2) ファシリテーションによって展開し、共同学習（学び合い）を重視すること。
- 3) ワークショップのテーマや「観客」の存在に対する意識など、個と個の関係性から個と社会の関係性に発展させることを視野に入れること。
- 4) 演劇ワークショップは、課題解決能力育成や主体的創造的態度涵養において、総合学習に最適のツールと考えるが、例えば声に出すことを通してテキストのテーマにアプローチするなど、知識技能の横断化・総合的化の効果も視野に入れること。

先の神奈川高教組機関紙記事における福田誠治都留文化大教授の講演は、「読解力」（言語・情報リテラシー能力）において、00年のOECD学習到達度調査（PIISA）において日本が8位と大きく後退したことが、「学力低下批判」＝「ゆとり教育批判」に拍車をかけていることへの警鐘である。知識を活用する能力、さらには、課題を解決する能力の低下が結果として表れたにも関わらず、詰め込み教育への逆行と競争主義・能力主義の強化が「学力向上」の対策としてイメージされている。

OECD学習到達度調査（PIISA）において、日本は、「数学リテラシー能力」00年度1位・03年6位・06年10位、「科学リテラシー能力」00年度2位・03年1位・06年5位、「読解力」00年8位・03年14位・06年15位と後退を続けている。参加国数が、00年度32カ国・03年41ヶ国・06年56ヶ国と増加しているため、正確には、後退ではなく進歩をしていない。

それにも関わらず、中山元文科大臣が先鞭を付けた教育政策は進展を続け、07年からの全国学力・学習状況調査（悉皆）復活、08年の内閣・教育再生会議提言での授業時間増等と、それを受けた観のある11年度（小）・12年度（中）・13年度（高）からの学習指導要領改訂による授業時間増・総合学習削減等が現実のものとなっている。神奈川県教育施策では、先述の県教委「学力向上推進及び特色ある県立高校づくり推進事業」の中に「学力向上進学重点校」10校を据え、進学を「教育目標」としている。その結果、「国公立合格70名、難関私立大学120名、現役合格率65%」を学校目標として掲げる県立高校さえ生じている。現在の教育界は、知識活用能力・課題解決能力の

低下に対策を練る、と同時に、詰め込み教育・競争主義能力主義教育へと逆行するという矛盾を抱えた状況となっている。

言うまでもなく、国際的学力水準は前者にある。知識量に係る課題は低学力層へのケアであり、これは教育格差の問題に直結をしている。例えば、音符理解の困難さから生じる音楽嫌いに対してリトミック*の方法論が考案されたように、前者の推進によって後者を進展させることを考察するべきである。活用・解決は、他者に対してまた他者とともにおこなわれる営みであり、知識活用能力・課題解決能力の根底にはコミュニケーション能力が必須である。

上記4点の教育目的は、以上の認識を根本とする。

*楽器の演奏訓練を早期から闇雲にやらせるのではなく、音を聞き、それを感じ、理解し、その上で楽器に触ってみる、音を組み合わせる音楽を作ることの楽しさを身体全体で味わわせ、その喜びの中で、音を出し、奏で、そこから旋律を作っていくことへの興味と音感を育む教育方法。

3. 07年度講座の反省

略

4. 08年度講座のコンセプト

「個と個の関係性から個と社会の関係性に発展させることを視野に入れること」の教育目的に言う「社会」とは自己以外の不特定多数の存在を意味する。朝日新聞08年4月6日の18歳成人論（国民投票法に係る）に関する特集記事の中に興味深い発言を見出したので、下に引用する。演劇ワークショップがこうした状況に対する有効性を持つことができないだろうか。

「若い人が時代の鏡的なところはすごくある。はっきり見えるのは非社会性の傾向だ。『反社会』に走る元気はなくなり、徹底的に社会にコミットしないという『反抗の身ぶり』が出てきた。今の社会は、敵が見えず、はっきり悪いヤツが存在しにくい。反抗の対象が目に見えにくい中で、弱い方に押しやられ、意欲を奪われて非社会的になっていく若者が多くなった。」（精神科医／齋藤環）
（耕論「『大人』になる若者へ」・作家石田衣良との対談）

「『観客』の存在に対する意識」は、「演劇体験」の授業の中で実践をしている。授業内のエチュードなどでは受講者に「観客」の役割を振り、また、前期後期各1回ずつ、文化祭・授業成果発表型学校説明会への参加や校内公演を実施している。しかし、中学生と中学生保護者対象の授業成果発表型学校説明会以外の「観客」は、顔を見知った友人や保護者であり、「自己以外の不特定多数」としての存在感は希薄である。

学校で日常的におこなう教育実践としては、「ワークショップのテーマ」へのアプローチに「社会」を求めるべきと考える。07年度の失敗を鑑み、テーマは必ずしも社会的政治的問題に依拠する「強力な社会性」である必要はないと思う。

略

08年度講座依頼内容

- 1) 例年と同様に、開放のための体ほぐしやシアターゲーム・コミュニケーションスキルをアップさせるためのワークショップをお願いします。
- 2) 例年と同様に、創造を通して共有関係を形成するエチュード等のワークショップをお願いします。
- 3) 最終的に、上に記した「個と個の関係性から個と社会の関係性に発展させる」方法論を内包したワークショップをお願いします。08年度講座の目玉としたいと考えています。
- 4) 「知識技能の横断化・総合化の効果」は、受講者が教職員ですのでワークショップで要求する内容に答える素地は十分にありますが、時間的問題等から困難であればごだわりません。上記3)との関連で実践できたら幸いです。
- 5) 参加受講者は、全日参加とは限らず、途中から・途中まで・1回～2回のみの方もおりますが、常連化の傾向がありますので、特にその点に対する配慮は頂かなくとも結構です。